



第1回 COE国際シンポジウム 開催レポート

セッション 記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃

シンポジウム・プレシンポジウムのテーマは、19世紀後半、つまり、日本の開国から江戸時代の終焉、近代国家の出発という政治的、社会的変動期に、写真という未知のメディアがもたらされたことで、既存のメディアはどのような影響を受け、変容していくのか、技術と流通形態の問題を視野に入れ、版画と写真を軸にその変容のプロセスをみようとするものであった。わずか半世紀とはいえ、変動の激しいこの時期を一つに括ることは問題を封じ込めてしまう危険があるので、19世紀後半の前期を「記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃」、後期を「版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出」とに時期的に区分して論じた。

原信田實氏(国際浮世絵学会会員)は、「見えない都市 出来事を語る錦絵」で浮世絵版画『名所江戸百景』が実は安政2年(1855)10月2日に江戸を襲った地震を読み込んだ版画メディアであったという新しい説を披露した。これは、浮世絵版画が専ら芸術、あるいは美術史の観点から解説され、現代とは異なり民衆の安価な楽しみであった当時のあり方から考えれば、当然行き着く考え方であったはずである。しかし、これまで、地震との関係において読み込まれてこなかったということは、それほどに社会の通念とは、時代の支配的価値観に左右されるものだけということを示した。

セバスチャン・ドブソン氏(写真歴史家)は、「写真による日本に対しての眼差しの形成」と題し、横浜写真といわれる、開港後の横浜で販売された写真を手広く手掛けたベアトをはじめとする外国人写真家が、カメラのレンズを通して日本人をどのようにみていたのか、また、パリやアメリカでは日本人を撮影した写真家はどのよう

に日本人をみていたのかなど、主として撮影対象とされた日本人イメージの推移を論じ、作られた日本人像が外国に広まる実際の過程を論じた。

コンスタンチン・グーバー氏(ロシア海軍博物館チーフアーチスト)は、「船乗り・画家・発明家 アレクサンドル・モジャイスキーの芸術的・科学的遺産」のテーマで、1854年下田で開始された日露外交交渉のロシア側代表プチャーチンに随伴して来日した海軍士官モジャイスキーの事歴を紹介された。日本では、専らモジャイスキーはプチャーチンが伴った絵描きとして認識されてきたが、ロシアでは画家としてよりも、むしろ、ロシア最初の航空機設計者として著名であることなど興味深い事実を披露した。また、興味深いことには、ロシアでは下田でロシア使節団が日本人を撮影したとする記録は見当たらず、そうした見地からの研究もないとのことなどを明らかにした。

コメンテーターとして美術史家の渡辺俊夫氏(ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授)は、日本人のイメージが何世紀も前に描かれた日本人像に基づいて描かれると、それが是正されずに踏襲され、外国における日本人像が形成されていくことを実際の絵を提示しつつ論評した。つまり、写真に表出される日本人とは異なる描かれた日本人像が固定観念化していくプロセスを示した。

金子隆一氏(東京都写真美術館学芸課専門調査員)はコメントで、横浜写真で活躍する外国人の写真技術を日本人はどのように学んだのか、技術の伝授、相互の交流の実態をさらに詳しく調査する必要性を指摘した。(北原)

セッション 身体技法と祭祀芸能 祭祀者の動きと人形の動きから

本セッションでは、芸能に於いて身体表現が伝達しようとする心情・事柄と動作との間に共通性があるかどうかという疑問から出発し、中国の祭祀の場で演じられる祭祀者の動きに、そして韓国のもともと祭祀の場で演じられ芸能化してきた民俗芸能の動きの中から、さらに本来宗教色を帯びていたと考えられる人形の動きから、身体技法の特徴を捉える事で、人類文化の記憶を探ろうと試みた。

中国のヤオ族祭祀者の動きを張勁松氏(湖南省民間文芸家協会副主席)が扱い、「中国瑶族の祭祀者の身体技法」のテーマで話された。祭祀者の舞いは神を迎え、神を喜ばせ、神を送る目的をもち、時計と逆順の回転を組み合わせまた五方を意識している。マジカルなステップからは踏みしめる大地志向がある事が確かめられ、また神霊を招へいし、使役し、悪霊を除く事を目的としたマジカルな指と手を組み合わせた手訣を描く等があるとされた。

田耕旭氏(高麗大学教授・高麗大学民俗学研究所所長)は「韓国の祭祀芸能における身体技法 韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法」のテーマで話され、韓国の仮面劇はもともと祭祀の場で演じられてきたものが時を経て変化したものであり、仮面劇に登場する人物の動きは招福を象徴する動きとして手を振る動き、セクシャルな動き等がある。また除災を象徴する動きとして、疫神のシシタクタギがソメを取り戻す動き、また五方神將の手を挙げ踏み足をし回転する動き、柳の枝等を用いて悪の象徴を逐いやる動きがあるとされた。

大谷津早苗氏(昭和女子大学助教授)は「人形に見る身体技法 日中の比較から」のテーマで話された。本来宗教性を色濃くもつ三番叟が人形あやつりの演目にも取り入れられ、その動作から読み取ると、足を踏む事、

目が反り返り口を開き表情を変える事や赤い顔が用いられる事は悪霊を払う意味があり、天を仰ぐ動きも宗教的な動きに繋がるとされた。

以上パネリストの発表から、動きの中から読み解く時のキーワードは除災と招福ではないかと思う。災いを祓い清め福を招くための動きが重要である。もちろん中国のヤオ族の動きには道教の影響が伺えるが、本来人類には不孝をもたらすものに対する恐れがあり、それを無くそう祓い清めようとするために様々な動作を案出したのではと考える。一方でこうあれかしと幸福を招こうとする動作も忘れてはならないと考える。これらの動きは人類文化に記憶され、その記憶はアジアを超え広い地域に共通すると考える。(廣田)

セッション 民具と民俗技術

「民具」とは、日本常民文化研究所の創立者でもある渋沢敬三によって創出された概念である。「道具」とは機能面からみた呼び方だが、各国・各地で長い歴史のなかで使われてきた道具には、その地の風土や民俗・歴史それに民族性が染みついていて、この機能以外の付帯情報を重視した場合が「民具」であり、その民具を使いこなしてきた伝統的技術が「民俗技術」である。これらはともに非文字資料として、文字に記録されなかった諸民族の歴史情報の宝庫であり、これらの国際比較を通して、大規模な民族移動をともなって生成されてきた東アジア世界の歴史と民俗に迫ろうとするのが、このセッションの目的であった。

周星氏(愛知大学教授)は、「中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか」と題し、中国の研究は民芸品の芸術的価値を重視する傾向がよいが、近年の高度成長のなかで庶民の普通に見られた道具や器が急速に工業製品に置き換わる中で、「民俗文物」に関する関心が高まり、「民具」という言葉も使われはじめていることを指摘し、今後、民俗学界も口承文芸や民間文学のみならず民具にも目を向けるべきこと、歴史文献の考証にとどまらずフィールド調査を重視すべきこと、東アジアの比較民具研究を活発にすべきことを提起した。

尹紹亭氏(雲南大学教授・人類学博物館館長)は、「中国の犁の起源・形態とその分布」と題し、E・ヴェルトの西北インド起源犁の中国伝来説を批判して、中国には長江下流域では5000年前の石犁が大量に出土していること、

その地の在来犁はインド犁には似ていないことを上げて中国犁は中国起源とした。また雲南省のフィールド調査をふまえて、中国の犁を 大四角枠曲轆犁(長江中下流域) 無犁柱長轆犁(甘肅~雲南省) 四角枠長直轆犁(陝西~雲南省) 三角枠長直轆犁(西南・華南・中南) 三角枠曲轆犁(西南・華南・東南アジア)に5分類し、これらの犁型は民族移動と環境に対する適応の結果だと報告した。

高光敏氏(済州大学博物館学芸研究員)は、「排泄の民俗と民具 済州島・韓半島・舟山島の比較」と題して、生産ばかりを重視してきた研究動向に問題ありとして、環境問題とも関わる排泄を正面から取り上げて韓国・中国の比較を試みた。済州島は韓国でありながら中国的なトイレと豚小屋一体型であり、南海島ではトイレ・豚小屋・堆肥場は別で、下肥は背負い樽で運んで麦畑に施肥した。中国の舟山島では、トイレの糞桶、夜は夜桶にためた糞尿を畑に運んで糞糶で熟成させて施肥していると報告した。

コメンテーター近藤雅樹氏(国立民族学博物館教授)は、渋沢敬三の民具研究は民芸運動を展開した柳宗悦との対比でより鮮明になる。尹氏の報告は犁以外の民具・民俗技術のセットごとの比較でより豊かになろうと指摘した。安室知氏(国立歴史民俗博物館助教授)は、等閑視されてきた排泄民俗が取り上げられたことを評価し、生業や食文化の研究とともに今後の重要な研究課題であり、東アジアの物質文化研究の発展が期待されると指摘した。(河野)